

器種不明の形象埴輪(9) (第314図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2000	不明	残破片 高 < 7.6	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	2001と同一個体をなすと考えられる。表裏ともハケメ後ヘラ描きによる区画が施される。	天地不明。
2001	不明	残破片 高 < 13.1	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 5 YR 6/8③普通・普通	板状の破片である。表裏面ともナナメタテ方向のハケメ後、線刻による木の葉文が構成されている。	天地不明。
2002	不明	残破片 高 < 10.6	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	① B ② 明赤 褐 YR5/6③普通・普通	板状破片で斜行する縁辺の一部が残存する。裏面には粘土を貼り足し肥厚させている。両面ともタテ方向のハケメを施した上にヘラ描きによる綾杉文を配している。	PL149
2003	不明	残破片 高 < 7.2	①後円部西 側②2ト レ 2 E-13G 周堀内	① A ② 明赤 褐 2.5 YR5/6③普通・普通	板状の部分である。タテ方向のハケメ後、表裏両面に綾杉文状の意匠が線刻されている。	PL149
2004	不明	残破片 高 < 6.4	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	内側に緩やかに彎曲する破片である。内面はハケメをナデ消し赤色塗彩を重ねている。	
2005	不明	残破片 高 < 7.6	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① A ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	板状の破片である。裏面に大きな剝離痕がみられる。	
2006	不明	残破片 高 < 7.9	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② におい橙 5 YR4/6③普通・普通	一端の器肉が肥厚し、器面は内側に弧をなすと思われるが全容は不明である。一部にハケメを残し、粗雑にナデている。	天地不明。
2007	不明	残破片 高 < 7.0	①後円部墳 頂部～上段 ②後円C-II	① A ② 橙 7.5 YR 6/6・におい橙 7.5 YR6/4③普通・普通	小径の筒状を呈する。	外面は磨滅している。
2008	不明	残破片 長 < 6.2	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 5 YR 6/8③普通・普通	棒状で先端にいくに従い径を細め、尖る。本体からの剝離痕がみられる。粗雑なナデが施される。	
2009	不明	残破片 高 < 4.3	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 2.5 YR 6/6③普通・普通	板状の小破片、処々によりやや肥厚をちがえる。表面に剝離が施されるか。	天地不明。
2010	不明	残破片 高 < 6.2	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① A ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	帯状を呈していたか。裏面は本体からの剝離痕である。内側に緩やかに彎曲する。径3.5cm程の剝離痕があり、その周縁には付属品装着時ナデがみられる。	胎土分析試料。
2011	不明	残破片 高 < 4.5	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① A ② 明赤 褐 2.5 YR5/6③普通・普通	薄い粘土板からなる。ハケメ後線刻を施す。裏面には剝離痕がみられる。	天地不明。
2012	不明	残破片 高 < 11.5	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	① B ② 明赤 褐 YR5/6③普通・普通	1987と同様。	PL149
2013	不明	残破片 高 < 4.7	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 5 YR 6/8③普通・普通	ヨコ方向に緩やかに彎曲する破片である。タテ方向のハケメの上にナナメ方向に規則性をもたない13本の線刻がみられる。	天地不明。 黒色の付着物あり。
2014	不明	残破片 幅 4.6 高 < 5.2	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① A ② 赤 褐 2.5 YR4/6③普通・普通	板状の小片である。小口的一端はU字状に繰り込まれている。各面ともナデられているがヘラ切りの痕跡がみられる小口面が本体と接続していたか。	PL149
2015	不明	残破片 高 < 4.3	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	① B ② 橙 2.5 YR 6/6③普通・普通	突帯のめぐる小破片である。	

器種不明の形象埴輪(10) (第315図)

No	器種	量目	出土位置	①胎土 ②色調 ③焼成	特徴	備考
2016	不明	残破片 高 < 11.0>	①後円部墳 頂部～上段 ②鞍部WIV	①B②明褐7.5 YR5/6③良好・ 普通	板状の破片である。一部にみられる周縁部は一部が繰り込まれたようになっていたか。外面はハケメをナデ消した後、平行するヘラ描きを施し、一部の区画内に赤色塗彩を施す。周縁部端面にも赤色塗彩を施す。	天地不明。
2017	不明	残破片 高 < 6.2>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部	①B②橙7.5YR 6/8③普通・普通	釣針状を呈する。本体に付属していたもので上端は剥離痕を残している。	天地不明。 PL149
2018	不明	残破片 高 < 9.3>	①後円部西 側②C-2 -V-2	①B②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	大型品の一部と思われる。外面に剥離痕とそれを接合した時につけられたナデがL字状に認められる。	
2019	不明	残破片 長 < 6.2>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部	①B②明褐7.5 YR5/6③普通・ 普通	人物の手を接合するように棒状粘土を本体の中空部分が包み込んでいる。本体の一部は粘土を貼り足し肥厚させ、ヘラ描き沈線を描き施すところのみみられる。	PL149
2020	不明	残破片 高 < 7.5>	①後円部西 側②C-2 -IV-2	①A②橙7.5YR 6/8③普通・普通	木の葉状をした板状粘土で、一端は欠損する。中央部分はやや肥厚し、そこから葉脈状のヘラ描きを施す。	PL149
2021	不明	残破片 高 < 6.9>	①後円部西 側②WC II	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	板状を呈する破片、内外面にハケメを施す。切り込みの一部が残存する。	
2022	不明 (紐)	残破片 長 < 3.3>	①後円部西 側②B-I -1-2	①A②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	人物などに付属する紐か。	
2023	不明	残破片 長 < 4.5>	①後円部西 側②VI	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	径10mmの粘土紐、両端は欠損している。付属品である。	
2024	不明	残破片 長 < 4.8>	①後円部西 側②B-I No51	①A②明赤褐 2.5 YR5/6③普 通・普通	粘土紐を曲げ、環状に成形していたと考えられる。下端に比べて上端の径が減っている。人物の耳環か。	外面に黒色の の付着物あり。
2025	不明	残破片 高 < 5.3>	①出土地不明 人、III、 No 3	①A②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	厚さ8・9mm、木の葉状の粘土である。本体から剥離している。ヘラ描き沈線により葉脈状の意匠を描き、区画内を一段おきに赤色塗彩を施す。	PL149 後円部西側 出土。
2026	不明	残破片 高 < 8.6>	①後円部南 側(後方)② 10トレ3区 上～中段	①A②橙2.5YR 6/6③普通・普通	緩やかに外反する破片である。外面はタテ方向を基本とするハケメ、内面はナナメ方向のナデを施す。	
2027	不明	残破片 高 < 4.2>	①後円部西 側②C-2 -I-2	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	厚さ8～9mmの粘土板を丸く輪にしている。径50mmを復元できる。内面は剥離痕が認められ、本体に付属していた部分と考えられる。	
2028	不明	残破片 高 < 4.4>	①くびれ部 西側②16ト レ5区	①B②橙5 YR 7/8③普通・普通	薄い板状の粘土で反り返っている。人物の下げ美豆に付く飾りの可能性が考えられる。	
2029	不明	残破片 高 < 5.4>	①後円部西 側②C-2 -VI	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	幅35mm、厚さ7mmの粘土紐2枚を斜格子に重ねている。上面にはヘラにより格子模様が配されている。裏面は本体から剥離した状態のみみられる。靱負の頭部被物の付属品か。	
2030	不明	残破片 高 < 2.6>	①くびれ部 西側②16ト レ5区	①A②橙7.5YR 7/6③普通・普通	薄い板状の粘土で、途中で欠損している。2028と同様の形状を呈していたか。	
2031	不明	残小破片 高 < 4.0>	①後円部西 側②C-2 -I-2	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	人物の胸部の破片か。ヘラ描きのヨコ線に刺突を列状に重ねている。	
2032	不明	残破片 高 < 6.8>	①後円部西 側②C-2 -V-2	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	本体に付属する舌状の粘土板である。欠損端部はL字状に屈折したか。器面はナデている。幅32mmを測る。	
2033	不明	残破片 高 < 4.2>	①後円部西 側②C-2 -VI	①A②明褐7.5 YR5/6③普通・ 普通	本体に付属する幅40mm、厚さ6mmの薄い板状粘土の破片である。	
2034	不明	残破片 長 < 6.4>	①後円部西 側②C-2 IV-2	①A②橙7.5YR 6/8③普通・普通	带状の粘土板の破片である。幅30mm、厚さ6mm、本体から剥離した付属品である。	外面磨滅。

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2035	不明	残破片 径 (16.3) 高 <10.6>	①後円部南側(後方)②10トレ7区周堀内	①A②橙5YR6/6③普通・普通	円筒形の本体に、下幅3.5cmの帯状の突帯がめぐる。胴部外面にはハケメが施される。	
2036	不明	残破片 長 <5.6>	①後円部西側②WC II	①A②橙5YR6/8③普通・やや軟質	棒状の粘土、端部に向けてやや径を増やす。一端は欠損する。	
2037	不明	残破片 高 <8.4>	①後円部西側②C-2 IV-2 No20 C-2-3 IV、C-2 IV-2	①B②橙5YR6/6③普通・普通	袋状を呈する。外面にはハケメを施した後へラ描き沈線による渦巻文が両面に配される。上面にも渦巻文がみられる。	PL149

器種不明の形象埴輪(1) (第316図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2038	不明	残破片 高 <11.2>	①くびれ部西側②拡1、1号埴輪	①B②明赤褐5YR5/6③普通・普通	形象の基部である。外面タテハケ後断面三角形の突帯を貼り付ける。内面はナデている。	
2039	不明	残破片 高 <9.7>	①後円部墳頂部～上段②BT-VI	①B②明赤褐2.5YR5/6③普通・普通	板状を呈する破片である。外面はハケメ調整後へラ描きによる弧状の沈線とこれに接する2重沈線の鋸歯文が認められる。一部に剝離の痕跡がみられる。	天地不明。
2040	不明 (人物?)	残破片 高 <7.6>	①くびれ部西側②C-5-VI	①B②赤褐5YR4/6③普通・普通	本体に幅1.3cm程の粘土紐が3本貼られている。	
2041	不明	残破片 高 <9.6>	①くびれ部西側②C-5	①B②明赤褐5YR5/8(表)、明褐7.5YR5/6(裏) ③普通・やや軟質	先端は器肉を薄くして尖る。外面タテハケ、内面はヨコハケ、ナナメハケを施す。	
2042	不明	残破片 高 <6.8>	①くびれ部西側②C-5-VI	①B②明赤褐5YR5/6(表)、褐10YR4/4(裏) ③普通・普通	本体に貼り付く厚さ9mm程の粘土板で、内彎している。外面はハケメ後、へラ描き沈線により区分が施されているようで一部に赤色塗彩が施されている。	
2043	不明	残破片 高 <7.3>	①くびれ部西側②C-5	①B②明赤褐5YR5/8③普通・普通	外面タテハケ後へラ描きによる斜行線文を施す。	黒色の附着物あり。
2044	不明	残破片 高 <4.3>	①前方形西側②前方WT	①B②明赤褐5YR5/8③普通・普通	厚さ8mmの粘土板が彎曲する本体に貼り付いていたと考えられ、その間隙に粘土を補強している。	天地不明。
2045	不明	残破片 高 <3.9>	①くびれ部西側②拡1、2号埴輪	①A②褐7.5YR4/6③普通・普通	薄い板状粘土である。本体から剝離したもので、本体の形状にそくして端部が内彎している。	
2046	不明	残破片 高 <11.3>	①くびれ部西側②WC 4III	①B②橙7.5YR6/6③普通・普通	本体は大型品が想定され横断面は大径の円あるいは矩形を呈すると思われる。外面には水平方向に幅5cmの板状粘土が張り出し、その下面には粘土塊を貼り補強している。調整は接合部分をナデている他はハケメを施す。内面に1箇所径8mmの穿孔が途中まで刺突されている。	PL149
2047	不明	残破片 高 <4.9>	①くびれ部西側②C-4 II	①A②橙7.5YR6/6③良好・普通	本体に付属する帯状の粘土紐で一端は本体の形状に沿って外反、欠損する。幅45mm、厚さ11mmを測る。	
2048	不明	残破片 高 <11.9>	①くびれ部西側②C-4 IV a、C-2 IV	①B②橙7.5YR6/6③普通・普通	板状粘土を巻き、角状の形状をつくっている。表面はハケメを施し、赤色塗彩する。裏面はナデを施す。	PL149

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	備 考
2049	不明	残 破片 長 < 5.4>	①鞍部墳頂部 ②鞍部	①A②橙7.5YR 6/8③普通・普通	長径2.8cm、短径2.0cmの断面楕円形の棒状粘土、両端は欠損する。人物に付属するか。	
2050	不明	残 破片 長 < 5.1>	①くびれ部 西側②WC -IV	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	径29~35mmの棒状粘土で、端部に向けてやや太くなる。一端は欠損で、本体から剥離している。	
2051	不明	残 破片 径 (2.5) 長 <13.6>	①くびれ部 西側②C- 5-VI	①A②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	棒状の粘土であるが一端は尖る。もう一方は欠損するが端部はつぶれ扁平である。一部に赤色塗彩が施される。美豆良あるいは垂髪か。	PL149
2052	不明	残 破片 高 <10.9>	①鞍部墳頂部 ②鞍部	①B②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	大径の本体から水平方向に器内の厚い板状粘土が突出する。外面ヨコナデを施す。	PL149

器種不明の形象埴輪(12) (第317図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	備 考
2053	不明 (基台部)	残 基台部 底 16.5 高 <61.2>	①くびれ部 西側② 拡 1、2号埴 輪	①B②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	本文中参照。	PL150
2054	不明	残 破片 高 < 6.5>	①くびれ部 西側②拡1	①B②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	2枚の粘土板を合わせ袋状に成形している。中空であったか。外面の一面にはヘラ描きによる沈線か平行して刻まれている。	
2055	不明	残 破片 高 <11.6>	①くびれ部 西側②鞍部 W	①A②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	棒状の粘土、両端の径はやや異なる。人物等の付属品か。	器面の磨滅 著しい。 PL150
2056	不明	残 破片 高 < 7.4>	①くびれ部 西側②鞍部 VI	①B②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	幅4.4cm、厚さ1.5cmの粘土帯、一端は丸みをもつ。付属品か。	器面の磨滅 著しい。
2057	不明	残 破片 高 < 5.1>	①くびれ部 西側②拡1 中段	①B②橙5 YR 6/6③普通・普通	外面タテハケ後ヘラ描き沈線により木の葉様の文様が刻まれている。	
2058	不明	残 破片 高 < 7.8>	①くびれ部 西側②WC V・VI	①A②橙5 YR 6/6③普通・普通	端部は山形に切り込みが入れられている。外面、ハケメを一部ナデている。内面には粗雑なハケメを残す。	PL150
2059	不明	残 破片 高 <16.0>	①くびれ部 西側②拡1 後円上段1 -3	①B②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	長円形の断面を有する。全体に小径であるが、除々にその径を変化させている。外面はハケメを充填する。内面には粘土紐の接合痕を明瞭に残す。	PL150
2060	不明	残 破片 高 < 6.3>	①くびれ部 西側②鞍部 W-II	①A②赤褐5YR 4/6③普通・普通	径2.2cmの棒状の粘土である。両端は剥離痕が認められる。整形は不十分で指頭による押圧を残す。内面の補強に使用されていたか。	
2061	不明	残 破片 長 < 4.2>	①くびれ部 西側②鞍部 WCT-VI	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	扁平な粘土紐、先細りして丸く収束する。器面にはナデが施される。人物の付属品、手の先あるいは鎌先の可能性があるか。	
2062	不明	残端部破片 高 < 4.5>	①鞍部墳頂部 ②鞍部WC T-VI	①B②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	本体端部外面に粘土帯を貼り肥厚させる。外面にはヘラ描き沈線により鋸歯文を区画し、内部に平行沈線を充填する。	天地不明。 PL150
2063	不明	残 破片 高 < 9.9>	①くびれ部 西側② 拡 1、2号埴 輪中段	①B②赤褐5YR 4/8③普通・普通	外面タテハケ後ヘラ描き沈線による文様を配している。内面はナメハケを施す。	外面に黒色 の付着物あり。 PL150

器種不明の形象埴輪(13) (第318図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2064	不明	残破片 高 < 3.1>	①くびれ部 西側②WC -V	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	刺突文を伴うヘラ描き沈線を区画線におき、内部を平行沈線により細分していると思われる。	天地不明。
2065	不明	残破片 高 < 3.5>	①くびれ部 西側②WC IV	①A②橙5YR 6/6③普通・普通	外面タテハケの上にナメ方向のヘラ描きを交差させている。裏面はナデを施す。	天地不明。
2066	不明	残破片 高 < 6.7>	①くびれ部 西側②鞍部 W	①A②明赤褐5 YR5/8③普通・ 普通	板状品の破片、外縁が弧状をなす。	
2067	不明	残破片 高 < 4.9>	①くびれ部 西側②C- 5-VI	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	本体に横位に貼り付いた板状粘土と考えられる。表面には、ヘラ描き沈線により、上方から2重、下方から一重の対向する円弧が配されている。	
2068	不明	残破片 長 < 3.6>	①くびれ部 西側②C- 4IVa	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	直径11~12mmの粘土紐である。両端は欠損するが輪になっていたか。大物に付属する着衣の紐などの可能性がある。	黒色の付着物あり。
2069	不明	残破片 高 < 2.1>	①くびれ部 西側②C- 4・5	①B②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	ナメ下方に外反する。帽子の鐙あるいは人物の着衣の裾部か。上面に2本1単位の平行するヘラ描き沈線により鋸歯文が構成されていると思われる。	PL150
2070	不明	残小破片 高 < 2.8>	①くびれ部 西側②WC -V	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	ヘラ描きの沈線による文様が配され则认为される。	
2071	不明	残破片 幅 < 3.4>	①くびれ部 西側②WC V	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	本体から剝離した板状粘土の破片である。側縁のやや内側にこれに沿って刺突文を伴うヘラ描き沈線が施され、その外側に径16mmの円形貼付文が1つ残る。	天地不明。
2072	不明	残小破片 高 < 4.4>	①前方部西 側②WC T VI	①B②明褐7.5 YR5/6③普通・ 普通	板状の破片で内部に平行する2本のヘラ描き沈線を配し外側の沈線には刺突文を重ねている。また径19mmの円板を貼り付ける。	
2073	不明	残破片 高 < 5.5>	①前方部西 側②前方W VVI	①A②明赤褐5 YR5/6③良好・ 普通	本体に付属する薄い板状粘土である。側縁に沿って刺突文を伴うヘラ描き沈線を沿わせ、その区画内に径17mmの円形浮文を貼り付けている。	
2074	不明	残破片 高 < 9.6>	①くびれ部 西側②鞍部 WCTV	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	厚さ8mmと薄い板状の付属品、裏面には本体からの剝離痕が認められる。全体形状は不明である。表面にはヘラ描きの沈線を2重に施し、外側の区画には刺突を重ねている。側縁近くには径2.0cmの円形の粘土板を貼付する。	天地不明。 PL150
2075	不明	残破片 長 < 4.4>	①くびれ部 西側②C- 5	①A②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	やや彎曲する棒状粘土の破片である。	
2076	不明	残破片 高 < 6.0>	①くびれ部 西側②IV	①B②明褐7.5 YR5/6③普通・ 普通	形象の基台部か。近接して断面M字形の突帯2条が配される。	内面に2条のヘラ記号。
2077	不明	残破片 高 < 5.5>	①くびれ部 西側②C- 4	①A②明褐7.5 YR5/6③普通・ 普通	形象の基台部か。口縁部の端部外面に断面M字状の突帯を2条配する。先端は丸みをもって収束する。	天地不明。 PL149
2078	不明	残破片 高 < 6.9>	①くびれ部 西側②WC A III B	①B②橙7.5YR 6/6③普通・普通	形象の基台部か。外面タテハケ後断面台2状の突帯を2条貼り付けをする。内面は丁寧なヨコナデ。	PL149
2079	不明	残口縁部 破片 高 < 14.0>	①くびれ部 西側②16ト レ4区	①B②橙5YR 6/8③普通・普通	あまり外反せず除々にその径を大きくしているか。口縁部の先端外面は断面台形状に肥厚、その直下、7.3cmの間隔をあけて2条の突帯がめぐる。外面はタテハケ、内面はナデが施される。	内面に2条のヘラ描きが見られる。形象の基台部か？ PL149
2080	不明	残口縁部 破片 高 < 7.8>	①くびれ部 西側②拡1	①B②橙5YR 6/8③普通・普通	形象の基台部か。外面は先端とその直下に2条の突帯をめぐらせている。器面はナデが施されている。	PL149
2081	不明	残口縁部 破片 高 < 6.1>	①くびれ部 西側②16ト レ4区	①B②明赤褐5 YR5/6③普通・ 普通	外面の先端は突帯状に粘土紐を貼り付け、端面を幅広に形成する。また、この直下に断面M字状の突帯がめぐる。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケ、ナデが見られる。	形象の基台部か？

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	備 考
2082	不明	残 口縁部 破片 高 < 5.7>	①北西隅周 堀②堀5	① B ② 橙 5 YR 6/8③普通・普通	緩やかに外反して立ち上がる先端は外面に2条突帯がめぐ る。	

器種不明の形象埴輪(14) (第319図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	備 考
2083	不明	残 破片 高 < 8.8>	①前方部西 側②WC VI	① B ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	板状の破片である。外面にはタテハケ後一辺3.0cm前後の四方形に分割、内部にタテ・ヨコ方向に交互にヘラ描きし、網代様の文様を描いている。	PL150
2084	不明	残 破片 高 < 6.8>	①前方部西 側②WC VI	①A②明褐7.5YR 5/6③普通・普通	本体から筒状の部分が突出する。外面タテハケ、内面ナデ、ヘラナデを施す。	
2085	不明 (盾持ち人の耳?)	残 破片 高 < 3.6>	①前方部西 側②4トレ X-14・15 G周堀内?	①A②明赤褐2.5 YR5/6③普通・普通	縁部をナデている。	
2086	不明	残 破片 高 < 12.2>	①前方部西 側②前方W V、WC VI	① B ② 明赤褐5 YR5/8③普通・普通	板状の破片である。外面にヘラ描き沈線による格子状文を配し区画内に縦横の平行線を充填する。	PL150
2087	不明	残 破片 高 < 8.9>	①前方部西 側②WC T -VI	① A ② 明褐7.5 YR5/6③良好・普通	外面タテハケ後狭小な断面M1タイプの突帯を貼り付ける。ヘラ描きにより横行しカギ状に曲がる沈線がみられる。	
2088	不明	残 破片 高 < 5.1>	①外堀②4 トレX-14 G周堀内	①A②橙2.5YR 8/6③普通・普通	格子状板飾りの一部か。本体に貼り付く側にやや幅を有する粘土板である。上面にはハケメ、側面にはナデを施す。	
2089	不明	残 破片 高 < 8.6>	①前方部西 側②3トレ V-16G中 段	① B ② 明赤褐5 YR5/6③普通・普通	円筒形部分の破片である。基台部あるいは人物の胴部破片か。外面はハケメ、内面はナデを施す。	
2090	不明	残 破片 幅 < 3.2>	①前方部西 側②4トレ X-15G下 段	① A ② 明赤褐 2.5 YR5/6③普通・普通	外面は弧状をなし、ハケメが施されている。付属品と思われる。	
2091	不明	残 破片 長 < 3.0>	①前方部西 側②WC T IV	①A②橙7.5YR 6/6③普通・普通	鈴状の粘土塊であるが鈴口の表現はみられない。器面はナデを施す。	
2092	不明	残 破片 高 < 16.4>	①出土地不 明	① B ② 明赤褐5 YR5/6③良好・良好	器材の破片か。円筒状の本体から板状粘土がヨコ方向に翼状に張り出しているものと思われる。翼状部分は縁辺から3.5cm程がわずかに肥厚している。表面は刺突文を伴う縦位線により3つの文様帯に区分されている。周縁部寄りには刺突文を伴う沈線により鋸歯文が配され内区には平行線が充填されている。次の文様帯は長方形に細分され内区には交互に方向をちがえた平行する沈線で満たされている。その内側の区画は鋸歯文と格子状文の組みあわせのようである。	PL150
2093	不明	残 破片 高 < 12.8>	①前方部西 側②前方W -III	① B ② 明赤褐5 YR5/6③普通・普通	器肉の厚い、やや彎曲する破片である。外面タテハケ後、突帯を貼り付けている。器面の一部にヘラ描きの沈線を施し、それを消すように周辺をナデている。	
2094	不明	残 破片 長 < 5.1>	①前方部西 側②3トレ V-15G下 段	① A ② 橙 5 YR 6/6③普通・普通	細い粘土帯で先端が尖る。本体に沿って彎曲している。	
2095	不明	残 破片 高 < 3.6>	①前方部西 側②4トレ X-15G下 段	① A ② 橙 2.5 YR6/6③普通・普通	外面はタテハケ後、残存下端をヨコナデ、その上を2本1単位の鋸歯状工具で刺突している。内面はナメ方向のハケメを施す。径約4.0cmの透孔がみられる。	

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2096	不明	残破片 高 < 6.8>	①前方部西側②前方W	① B ②明赤褐5 YR5/6(表)、褐7.5 YR4/4(裏) ③良好・普通	やや彎曲する破片、外面にリング状の付属品か。剝離した痕跡がみられる。	
2097	不明	残破片 高 < 4.5>	①前方部西側②WCT-V	① A ② 橙7.5 YR6/6③普通・普通	板状の破片である。径22mmの透孔を穿ち、周縁に粘土を貼り縁取りをするか。また、外面には粘土の剝離痕が認められる。	天地不明。
2098	不明	残破片 高 < 8.8>	①前方部西側③トレV-16G	① B ② 橙5 YR6/8③普通・普通	円筒状の本体を幅1.6cmの粘土帯が取り巻いている。器面はナデられている。	
2099	不明	残破片 高 < 5.3>	①前方部西側②前方W	① A ②明赤褐5 YR5/6③普通・普通	外面はナデ調整の上にヘラ描きによる弧状の沈線3本がみられる。	

器種不明の形象埴輪(15) (第320図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2100	不明	残破片 長 < 11.0>	①出土地不明	① B ②明赤褐5 YR5/6③普通・普通	小径の筒状を呈する破片である。外面にはハケメ後、一定方向にヘラ描き沈線を平行して施す。一部に剝離痕が認められる。	天地不明。 PL150
2101	不明	残破片 高 < 14.0>	①出土地不明	① B ② 橙7.5 YR6/8③普通・普通	本体に帯状の粘土板を貼り付けている。	天地不明。 PL150
2102	不明	残破片 高 < 5.6>	①出土地不詳②前方部	① B ② 橙5 YR6/8③普通・普通	厚さ13mm、幅38mmの板状の粘土である。一端は割れている。本体に貼り付いていたものと考えられる。	
2103	不明	残破片 高 < 5.1>	①出土地不明	① A ②にぶい赤褐5 YR5/4③普通・普通	ひょうたん状を呈し本体に付属するものである。先端部分はヘラによる切り込みがなされ、下段には粘土粒を2列貼り付けている。鈴を表現していると考えられる。上段は中実、下段は中空の成形である。	PL150
2104	不明	残破片 高 < 3.3>	①出土地不明	① B ② 橙5 YR6/6③普通・普通	棒状の本体に薄い粘土板を重ね、周縁に刺突を連ねている。	
2105	不明	残破片 高 < 7.1>	①出土地不明	① A ②明赤褐2.5 YR5/6③普通・普通	径22.0cmの円筒形を呈しているか。約3.0cmの間隔を置いて断面三角形の低い突帯がみられる。外面は丁寧になデている。	
2106	不明	残破片 高 < 6.5>	①出土地不明	① B ② 橙5 YR6/8③普通・普通	板状の破片、本体に付属していたと考えられる。縁辺部近くの幅3.3cmは表面側が肥厚している。肥厚部分にはヘラ描き沈線による山形文が配される。また、割れ口的一端寄りには表裏面にわたり布目圧痕が残る。成形時のひび割れを補修したものか。	

小像 (第321図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	備考
2107	土製品 (小像)	残 頭部～ 上半身 高 < 6.8>	①くびれ部 東側②拵4 中段下段	① A ② 橙5 YR6/8③普通・普通	本文中参照。	PL131

土 器
須恵器(1) (第323図)

No	器種	量 目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2108	須恵器 杯蓋	残 破片 口 (17.4) 高 < 3.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①粗砂少量②灰 黄2.5Y7/2③還 元、やや軟質	口縁部はナナメ外方に延びる。先端は薄く尖る。 右回転ロクロ成形と考えられる。底部外面には回 転を伴うヘラケズリが施される。	PL151	
2109	須恵器 杯蓋	残 破片 口 (16.4) 高 < 4.1>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①比較的精選白 色鉱物粒少量② 灰7.5Y5/1③還 元	右回転ロクロ成形と考えられる。口縁部はナナメ 外方に伸びる。先端は外方につままれたように尖 る。	PL151	外面に自然釉が かかる。
2110	須恵器 杯蓋	残 破片 口 (14.0) 高 < 3.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①白色鉱物粒② 灰黄2.5Y6/2③ 還元	口縁部はナナメ外方に延びる。先端は薄く尖る。 右回転ロクロ成形と考えられる。	PL151	
2111	須恵器 杯蓋	残 破片 口 (15.1) 高 < 3.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①白色鉱物粒② 灰7.5Y5/1③還 元	口縁部はナナメ外方に延び、先端は尖る。天井部 への変換点には沈線を伴う弱い稜ができる。		
2112	須恵器 杯蓋	残 破片 口 (15.0) 高 < 3.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①黒色鉱物粒② 灰黄2.5Y6/2③ 還元	口縁部はナナメ外方に延び先端は尖る。右回転ロ クロ成形と考えられる。	PL151	
2113	須恵器 杯身	残 破片 口 (14.3) 高 < 3.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円S T	①チャート、白 色鉱物粒②灰黄 2.5Y6/2③還元	口縁部は弱く内傾して立ち上がる。受け部は水平 方向に弱く突出する。右回転ロクロ成形。底部に は一部回転を伴うヘラケズリが施される。		
2114	須恵器 杯ある いは高 杯の身	残 破片 口 (14.0) 高 < 3.3>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①白色、黒色鉱 物粒②灰5Y6/1 ③還元、やや甘 い。	口縁部は弱く内傾して立ち上がり先端が尖る。受 け部は水平方向に突出する。右回転ロクロ成形。 底部外面に回転を伴うヘラケズリを施す。		
2115	須恵器 杯蓋?	残 天井部 高 < 1.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①白色鉱物粒を 多量に含入②灰 10Y4/1・黄灰2.5 Y5/1③還元、軟 質	右回転ロクロ成形。天井部は回転を伴うヘラケズ リを施す。		
2116	須恵器 高杯?	残 杯部破 片 高 < 4.0>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①白色鉱物粒② 灰 N5③還元	受け部はヨコ方向に弱く張り出す。杯底部は丸み を有する。右回転ロクロ成形。杯部外面は回転ヘ ラケズリ後ナデ調整を施しているか。		
2117	須恵器 杯身	残 破片 高 < 3.7>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	①白色、黒色鉱 物 粒 ② 灰 白 5 Y7/1③還元	口縁部は弱く内傾して立ち上がる。受け部は水平 方向に突出する。右回転ロクロ成形である。		
2118	須恵器 高杯	残 口縁部 破片 高 < 3.7>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①精選、白色鉱 物粒②灰 N5/1 ③還元	外面の途中に稜をなす。この下位にはナナメヨコ 方向のクシメ(ハケメ)状の文様が施される。右回 転ロクロ成形。	PL151	
2119	須恵器 高杯	残 破片 高 < 2.7>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①精選、白色鉱 物粒少量②灰 N5/1③還元、良 好	口縁部と底部の境界には短い明瞭な稜がめぐっ ている。蓋の可能性もある。	PL151	外面に自然釉が かかる。
2120	須恵器 高杯	残 口縁部 破片 口 (10.0) 高 < 2.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部	①精選、白色鉱 物粒少量②灰5 Y4/1・灰 N5/1 ③還元	わずかに外反して立ち上がる。鋭い稜をなして底 部へ移行する。径は小さすぎるか。	PL151	自然釉がかか る。
2121	須恵器 高杯	残 口縁部 破片 高 < 4.3>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S、石室上 部	①精選、白色鉱 物粒少量②暗緑 灰7.5GY4/1・ 灰5Y6/1③還 元、良好	ナナメ上方に立ち上がる。中位には2段稜をなし、 その間にナナメヨコ方向のクシメ状の文様が施さ れる。		

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2122	須恵器 高杯	残 杯下部 ～脚上部 高 <11.0>	①後円部墳 頂部～上段 ②1トレ2 F-20G、 後円部羨門 北	①白色鉾物粒② 灰白7.5Y7/1③ 還元、良好	脚部は長脚で中位に2条の沈線を配し上下を区切る。透しは狭小な長方形を呈し、上下2段、3方に穿つ。杯部は右回転ロクロ成形、底部外面の割れ口から脚部との接合痕が観察できる。脚部内面にしぼり痕がみられる。	PL151	
2123	須恵器 高杯	残 脚部上 半2/3 高 <10.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②1トレ2 E-20G	①灰白色、黒色 鉾物粒②灰7.5Y 6/1・灰10Y5/1 ③還元	透しは長脚2段で三方に配す。上下の透しの間は2条の沈線で画する。杯部は右回転ロクロ成形。脚部は外面にロクロ痕。内面にしぼり痕が残る。	PL151	自然釉がかか る。
2124	須恵器 高杯	残 脚上半 部2/3 高 <9.6>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①黒色鉾物粒② 灰白5Y7/2③還 元	長脚をなす脚部の上半部分である。透しを3方に配し、下位の透しとの間を1条の沈線により区画している。外面はロクロ目、内面にはしぼり痕がみられる。	PL151	
2125	須恵器 高杯	残 脚上半 部破片 高 <4.6>	①後円部墳 頂部～上段 ②1トレ2 F-20G	①黒色鉾物粒② 灰白2.5Y8/2③ 還元	脚部は長脚で透しを3方に2段配するものと思われる。外面にはロクロ痕、内面にはしぼり痕を残す。		
2126	須恵器 高杯	残 脚部下 半破片 高 <4.5>	①後円部南 側(後方)② 10トレ3区	①黒色鉾物粒② 灰 N4/1③ 還 元、焼締め、や や堅緻	長脚2段で透しは三方に配されている。残存部上端に沈線がめぐる。外面ロクロ痕、内面ロクロ痕としぼり痕がみられる。		自然釉がかか る。
2127	須恵器 高杯	残 脚部下 半1/3 高 <13.9>	①周堀②20 トレ2 N- 26G(注記 誤りか)	①白色鉾物粒② 灰 N5/1③還元	裾部に向けて外反、端部は外面に稜をなす。透しは三方に配されるところと考えられる。外面にはカキメを、内面にはロクロ痕を残す。	PL151	
2128	須恵器 高杯	残 脚部下 半破片 底 (14.0) 高 <9.1>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①精選、黒色鉾 物粒少量②灰 N5/1・灰黄2.5 Y7/2③還元、焼 締め	ロクロ成形で端部は大きく外反して裾部を形成する。透しは2段で三方に配される。中位に1条、下位に2条の沈線がめぐる。	PL151	外面に自然釉が 及ぶ。
2129	須恵器 高杯	残 脚部下 半1/3 底 (15.0) 高 <7.7>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上 部・石室上 部S	①白色・黒色鉾 物粒②灰 10 Y 5/1・灰 N4/③ 還元	裾部は大きく外反して延びる。端部は折れ、垂直面をなす。透しは3方に配されている。透しの下端には沈線が1条めぐる。	PL151	外面に自然釉が かかる。
2130	須恵器 高杯	残 脚部下 半1/3 底 (14.0) 高 <6.2>	①後円部墳 頂部～上段 ②17トレ1 区	①白色鉾物粒② 灰10Y6/1③還 元	下位に向けて大きく外反する。下端は外面に稜をなし、垂直面をもつ。端面は先端が尖る。透しは3方に配される。内外面にロクロ痕を残し、透しの下端に弱い沈線が1条めぐる。	PL151	
2131	須恵器 高杯	残 脚下半 部破片 高 <5.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①精選②暗青灰 10B G4/1③還 元	透しは3方に配され、切り込みの下端に2条の沈線がめぐる。内面にはロクロ目を良く残す。		内面に自然釉が かかる。
2132	須恵器 高杯	残 脚部破 片 高 <6.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円部上 段	①黒色・白色鉾 物粒②灰白2.5 Y7/1③還元、や や軟質	透しは3方に配されている。内外面ともロクロ痕が残る。透しの下端に弱い沈線がめぐる。		
2133	須恵器 高杯	残 脚部下 半破片 高 <2.1>	①鞍部墳頂 部②1トレ 2A-20G	①黒色鉾物粒② 灰白2.5Y8/2③ 還元、やや軟質	脚部下端は、外面に稜をもち、垂直に下がる。長方形と思われる透しの一部が残存する。内外面ともロクロ痕を残す。		
2134	須恵器 高杯	残 脚部破 片 高 <1.2>	①後円部墳 頂部～上段 ②17トレ	①黒色、白色鉾 物粒②灰 10 Y 6/1③還元	大きく外反した裾部は外面に稜をなし、断面の先端は尖る。		
2135	須恵器 高杯	残 脚部破 片 高 <3.2>	①後円部南 側(後方)② 10トレ4区	①黒色鉾物粒を 含む②灰白5Y 7/2③還元	下位に向けて大きく外反、裾部は外面に稜をなし垂直面をなす。断面は尖る。透しの下端の一部が残存する。内外面ともロクロ痕がみられる。		

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2136	須恵器 甕	残 口縁部 破片 高 < 3.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①白色鉾物粒少 量②灰 N5/1③ 還元、やや軟質	口縁部は頸部との境界に弱い稜をなした後ナメ 上方に開く。口縁部外面にはヘラ描き斜行直線文 が施される。	PL151	
2137	須恵器 甕	残 口縁部 破片 高 < 3.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円上段	①精選②褐灰10 YR4/1③還元、 焼締め	口縁部と頸部の境界には明瞭な稜がめぐる。頸部 外面には縦方向に直線文が施される。	PL151	内外面に自然釉 付着。

須恵器(2) (第324図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2138	須恵器 横瓶	残 1/2 口 (15.6) 胴 (31.2) 高 34.4	①鞍部墳頂 部②1トレ X-20Gと 2A-20G が接合	①白色・黒色鉾 物粒②灰 10 Y 4/1③還元	口縁部は大きく外反して立ち上がり、端部は鋭く 内折して立ち上がる。胴部は紐作り成形により、 成形時の側面に口縁部を接合している。外面はカ キメが施文される。内面はアテメをきれいにナデ 消している。	PL152	外面に自然釉が 及ぶ。
2139	須恵器 横瓶	残 1/2～ 2/3 胴長 32.5 高 <25.0>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上 部・石室上 部S	①石英をはじめ とした白色鉾物 粒②暗灰 N3/1 ③還元、焼締め	胴部は径に比して横幅を有する形状である。口縁 部は欠損する。粘土紐の巻き上げによる成形。外 面は平行タタキメの後、間隔をあけて1単位約9 本のカキメを施す。内面には青海波文状のアテメ が強く残る。	PL152	断面サンドイッ チ状に茶褐色部 分あり。
2140	須恵器 横瓶ま たは提 瓶	残 口縁部 破片 口 (12.0) 高 < 5.7>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①粗砂大の白色 鉾物粒②灰10 Y4/1③還元	ラップ状に大きく外反する。先端は外面に面をな し、その中位は沈線状にくぼむ。外面には12本1 単位と思われる波状文が2段重なっている。		
2141	須恵器 瓶	残 口縁部 破片 口 (14.2) 高 < 3.1>	①鞍部墳頂 部②1トレ 2A-20G	①白色、黒色鉾 物粒②灰5Y4/1 ・におい黄2.5 Y6/4③還元、焼 締め	口縁部の先端は外面に弱い稜をなして尖る。内面 も外形にあわせ、やや受け口状を呈する。		内面に自然釉が かかる。
2142	須恵器 横瓶ま たは提 瓶	残 口縁部 破片 高 < 5.1>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S	①粗砂大の白色 鉾物粒②暗緑灰 10G Y4/1③還 元	外反して立ち上がり先端を欠く。外面には波状文 が施される。		
2143	須恵器 長頸壺	残 胴部破 片 高 < 4.3>	①前円部東 北隅②竪3 2ピット	①黒色鉾物粒② 灰 N6/③還元	胴部上位の破片と考えられ、沈線が1条めぐって いる。右回転クロコ成形である。	PL151	

須恵器(3) (第325図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2144	須恵器 横瓶	残 口縁部 欠損 胴長径 37.9 胴短径 30.8 高 <32.4>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S・後円上 段	①白色鉾物粒を 多く含む②暗青 灰10B G3/1③ 還元	粘土紐の巻き上げにより、やや横幅のつまった胴 部を成形、小口に粘土板を貼付し閉塞する。胴部 のほぼ中央に口縁部を接合する。外面にはカキメ が施される。内面にはクロコ使用のナデが施され、 青海波文状のアテメが弱く残る。	PL152	器面に自然釉が およぶ。
2145	須恵器 提瓶	残 胴部下 半を中心に 1/2 短径(12.2) 高 <19.3>	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部 S・石室上 部	①白色鉾物粒を 含む②暗灰N3/1 ③還元、焼締め	口縁部、把手は残存しない。胴部は成形時の上側 が丸みを有する。外面は全面にわたり、10本1単 位とする施文具によるカキメを施している。内面 にはナデが施されている。	PL152	内外面に自然釉 がおよぶ。

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2146	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 口 (51.6) 高 <13.7>	①くびれ部 東側・後円 部西側②拡 4中段・6 トレ3区	①白色鉾物粒② 灰N5/・灰黄2.5 Y6/2③還元	大きく外反して立ち上がる。先端は尖る。外面は沈線、および疑似突帯により区画された文様帯が3段認められ、内部に8本1単位の波状文を配している。	PL152	自然釉がかかる。

須恵器(4) (第326図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2147	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 <11.5>	①後円部墳 頂部～上段 ②17トレ1 区・後円S T	①あまり緻密で なくザラついて いる白色鉾物粒 ②暗灰 N3/1③ 還元	先端は内側に向けて弱く立ち上がる。断面は尖り三角形をなす。2本1単位の沈線により区画された3段の文様帯には9本1単位と思われる波状文が配される。	PL153	
2148	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 < 6.1>	①くびれ部 東側②11ト レ2A-22 G	①白色鉾物粒② 暗灰 N3/1③還 元、良好	口縁部は外反して立ち上がる。外面には平行タタキメが残る。先端は内面がくぼみ断面三角形を呈する。外側には波状文がめぐり、沈線が下位を画している。	PL153	
2149	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 < 6.3>	①後円部西 側②19トレ 6区	①白色鉾物粒② 暗灰 N3/1③還 元、焼締め	先端は外方に面をなす。断面は三角形に尖る。外面には波状文を配す文様帯が2段認められる。	PL153	
2150	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 <14.1>	①後円部西 側②C-1	①白色鉾物粒② 灰10Y5/1③還 元	口縁部は大きく外反して立ち上がり、外側に面をなす。ここに2条の沈線が施される。中位の弱い沈線を境に上半の区画内には波状文3段が施される。	PL153	
2151	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 < 7.6>	①後円部墳 頂部～上段 ②B-V、 後円C-2	①白色鉾物粒② 暗青灰10BG4/1 ③還元	先端は外面がそがれ尖る。外面の文様帯は、上位2段が沈線を挟んで、波状文を配している。3段、4段目は2条の沈線を伴った疑似突帯により区画され波状文が施されている。	PL153	
2152	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 <13.8>	①鞍部墳頂 部②11トレ Z-18G・ 後円上段	①黒色・白色鉾 物粒、チャート ②灰オリーブ7.5 Y6/2・灰5Y4/1 ③還元、やや軟 質	先端は丸みを持って尖る。4条の沈線により区画される。先端直下の幅は狭いが他はほぼ等間隔である。文様は上位3段が1単位6～8本の波状文が配される。最下段はナデ調整による無文である。	PL153	
2153	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 <10.3>	①鞍部墳頂 部・後円部 墳頂部～上 段②後円上 段、鞍部頂 上	①白色鉾物粒② 灰褐7.5YR5/2・ 灰黄褐10YR5/2 ③還元、軟質	口縁部と胴部の接合に際し、外面に補強帯をめぐらしている。口縁部の外面には沈線による区画がなされ6条1単位の波状文が配されている。	PL153	焼きむら?
2154	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 < 7.4>	①くびれ部 西側②鞍部 WI	①白色鉾物粒② 暗青灰10BG4/1 ・灰10Y5/1③ 還元、焼締め	先端は断面三角形に尖り、外面の直下に沈線を伴う突帯を貼り付ける。外面は疑似突帯により区画される文様帯を2段残し、内部には9～11本1単位の波状文が配されている。	PL153	
2155	須恵器 大甕	残 口縁部 下半破片 高 <10.8>	①前方部墳 頂部②1ト レX-20G	①白色鉾物粒② 暗灰 N3/1③還 元、焼締め	口縁部の中位～下半の破片で2本の疑似突帯と、その区画内に施された10本1単位の波状文2段がみられる。	PL153	内面に自然釉がかかる。
2156	須恵器 大甕	残胴部上位 破片 高 < 4.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円ST	①白色鉾物粒② 灰10Y5/1③還 元	外面には口縁部との接合のため補強帯がめぐらされている。調整は外面がタテ方向のタタキメ後これをナデ消している。内面は頸部にナデが認められる他はアテメが残る。	PL153	

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2157	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 <11.4>	①前方部西 側②前方 W-I、前方 C-VI、D トレ	①白色鉍物粒② 暗灰 N3/1③還 元、焼締め	口縁部の中位から下位の破片である。疑似突帯により区画された3段の文様帯が残存する。上位2段は内部に11・12本1単位の波状文を充填している。最下段の文様帯はタテ方向のハケメ施文後上位に波状文を配し、下位をナデ消している。	PL153	

須恵器(5) (第327図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2158	須恵器 大甕	残 頸部1/ 4 高 <4.7>	①後円部西 側②6トレ 5区・後円 C-II	①白色鉍物粒② 灰10Y5/1③還 元、良好	口縁部は胴部の上端に粘土を接合し、くの字状に立ち上がったと考えられる。外面に補強帯を張り付ける。	PL153	
2159	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <7.2>	①くびれ部 西側②拵1	①黒色・白色鉍 物粒②灰白2.5 Y7/1③還元、軟 質	外面はタタキメ、内面はアテメを残す。		
2160	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <7.3>	①前方部墳 頂部②1ト レX-20G	①白色鉍物粒② 暗青灰5BG4/1 ③還元	外面には同心円状のカキメを、内面には同心円状のアテメを残す。		
2161	須恵器 大甕	残 頸部破 片 高 <5.8>	①くびれ部 西側②WC -4 III B	①白色鉍物粒② 緑灰7.5GY5/1 ③還元	口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部との接合部には外面に補強帯がめぐる。	PL153	
2162	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <8.0>	①前方部東 北隅②拵3	①白色鉍物粒② 灰 N4/1③ 還 元、焼締め	外面はタテ方向のタタキメ、内面にはアテメが認められる。		
2163	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <7.0>	①くびれ部 西側②18ト レ4区	①白色鉍物粒、 チャート②灰 N5/1③還元、焼 締め	外面はタテ方向のタタキメ。内面はアテメを残す。		
2164	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <10.1>	①後円部墳 頂部～上段 ②18トレ1 区	①白色鉍物粒② 灰7.5Y5/1・灰 N5/1③還元	外面ナデ調整。内面にアテメを残す。		
2165	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <9.2>	①後円部東 側②22トレ 4区	①白色鉍物粒② 灰7.5Y5/1③還 元	外面、タタキメを弱く残す。内面には同心円状のアテメを残す。		天地不明。
2166	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <15.4>	①前方部東 北隅②拵3 前方C-IV	①白色鉍物粒② 灰 N4/1③ 還 元、焼締め	外面はタテ方向のタタキメ、内面にはアテメが認められる。		
2167	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <14.8>	①前方部西 北隅②拵2	①白色鉍物粒② 暗青灰5B4/1③ 還元	外面はタテ方向のタタキメが、内面はアテメを施す。		
2168	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <8.7>	①後円部西 側②19トレ 4区	①白色鉍物粒② 灰7.5Y5/1③還 元	外面はナデ調整。内面にはアテメを残す。		
2169	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <16.9>	①くびれ部 西側②拵1 前方W-IV、 WCT-VI、 14トレ、I -15G、16 トレ、5区	①黒色の発泡、 白色鉍物粒②暗 灰 N3/1③還元	外面はタテ方向のタタキメを、内面はアテメを残す。	PL153	外面に自然釉がかかる。

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	写真	備考
2170	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <18.7>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円S T	①白色鉾物粒② 灰 N5/1③還元	外面のタタキメはその後の器面調整により明瞭でない。内面には同心円状のアテメを残す。	PL153	
2171	須恵器 瓶	残 胴部破 片 高 <3.6>	①鞍部墳頂 部②1トレ 2 A-20G	①白色鉾物粒を 含む②暗オー プ灰2.5GY4/1 ③還元	器肉は薄い。外面にカキメ、内面にアテメを残す。		
2172	須恵器 瓶	残 胴部破 片 高 <3.8>	①後円部墳 頂部～上段 ②1トレ2 B-20G	①白色鉾物粒② 暗オーブ灰2.5 GY4/1③還元、 良好	器肉薄い。外面はタテ方向のハケメ、内面はアテメを残す。		外面に自然釉がかかる。

須恵器(6) (第328図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	写真	備考
2173	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <16.8>	①くびれ部 西側・後円 部 墳 頂 部 ～上段②B -5、C- 5	①白色鉾物粒② 青灰5BG5/1③ 還元	外面平行タタキメ、残存部下にヨコ方向のカキメを重ねる。内面にはアテメを残す。	PL153	
2174	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <7.5>	①くびれ部 西側②11ト レZ-15G	①白色鉾物粒② 灰10Y5/1③還 元	外面はナナメタテ方向にタタキメを施した後、ヨコ方向に指ナデを重ねている。内面にはアテメが残る。		
2175	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <14.1>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円S T	①白色鉾物粒② 青灰10BG5/1③ 還元、焼締め	外面平行タタキメ、内面にアテメを残す。		
2176	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <7.3>	①くびれ部 西側②WC -4 III B	①白色鉾物粒② 青灰5BG5/1③ 還元	外面ナナメタテ方向のタタキメに一部、ヨコ方向の指ナデが重なる。内面は同心円状のアテメを施す。		
2177	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <11.5>	①くびれ部 西側②鞍部 -W-1	①白色・黒色鉾 物粒②灰10Y6/1 ・暗青灰5B4/1 ③還元	外面は平行タタキメの一部にナデを重ねている。		外面に自然釉がかかる。
2178	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <16.9>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円C- II・CT- II	①白色鉾物粒② 青灰5BG5/1③ 還元	外面はタテ方向のタタキメ、内面はアテメを施す。	PL153	
2179	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <19.2>	①後円部南 側(後方)・ 後円部西 側・後円部 墳頂部～上 段②後円C -II、2ト レ、2E- 14G、10ト レ内堀	①白色鉾物粒② 青灰10BG5/1③ 還元	外面はタテ方向のタタキメ、内面はアテメが残る。	PL153	
2180	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <13.5>	①後円部西 側②C-1	①白色鉾物粒② 青灰5B5/1③還 元	外面平行タタキメ。残存部下にヨコ方向のカキメが1段施される。内面はアテメが認められる。		

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2181	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <14.3>	①くびれ部 西側・後円 部墳頂部～ 上段②後円 C-II、B -5、16ト レ4区	①白色鈹物粒② 青灰5BG5/1③ 還元	外面はナナメタテ方向のタタキメ後、ヨコ方向に 指ナデを施す。内面はアテメを施す。		
2182	須恵器 大甕	残 底部破 片 高 <5.1>	①後円部墳 頂部～上段 ②後円C- N-1	①白色鈹物粒② 青灰10BG5/1③ 還元	底部は丸底である。外面はナナメ方向にタタキメ が重なる。この上にカキメが重ねられている。内 面にはアテメが残る。	PL153	

須恵器(7) (第329図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2183	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <25.7>	①前方部墳 頂部・後円 部 墳 頂 部 ～上段②後 円S T、4 トレX-20 G	①白色鈹物粒② 灰10Y5/1③還 元	外面は平行タタキメをナデている。内面には同心 円状のアテメがみられる。	PL153	
2184	須恵器 大甕	残 底部1/ 3 高 <8.1>	①前方部西 側②前方C -VI、前方 W-I、前 方WC-VI	①黒色の発泡、 白色鈹物粒②暗 灰N3/③還元	外面には10本1単位のカキメが間隔をあけて施さ れる。内面にはアテメが残る。	PL153	
2185	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <18.7>	①前方部西 側②WCT -III	①黒色の発泡、 白色鈹物粒②灰 10Y5/1③還元	外面は平行タタキメを、内面は同心円状アテメを 残す。	PL153	
2186	須恵器 大甕	残 1/3 口 (24.6) 胴 (40.2) 高 <49.8>	①くびれ部 西側・前方 部西側・前 方部西北隅 ・前方部墳 頂部・鞍部 墳頂部②1 トレ、X -14G・X -19G・X -20G・Y -21G・W -19G、3 トレ、18ト レ、拡1、 拡2、前方 CT	①石英をはじめ とした白色鈹物 粒②暗灰N3/・ 灰黄褐10YR4/ 2③還元、やや軟 質	口縁部は大きく外反して立ち上がる。沈線と隆線 帯で4段に区画し、上位3段には幅1.8cm、1単位 11本の施文具による波状文が充填される。最下段 は上半に波状文、下半にタテ方向のハケメが施さ れる。口縁部の先端は内折して鋭く尖る。口縁部 と胴部の節子後接合には外側に補強帯を貼り付け る。胴部は紐作り成形による接合痕を良く残す。 外面はナナメ方向の平行タタキが、内面には青海 波文状のアテメを残す。底部近くにはカキメを残 す。	PL154	焼成が不十分、 断面サンドイッ チ状を呈す。

須恵器(8) (第330図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2187	須恵器蓋	残 天井部分 高 < 2.1)	①外堀②23 トレ3区	①黒色鉾物粒② 灰7.5Y6/1③還元	天井部はあまり膨らみをもたず、偏平であったか。つまみは剥落しているがリング状を呈していた。右回転ロクロ成形、天井部中央にヘラケズリを施す。	PL154	内面磨耗、二次利用されたか。
2188	須恵器杯	残 1/3 口 (13.8) 底 (8.8) 高 3.8	①外堀②23 トレ3区	①粗砂少量、 チャート、長石 ②灰白7.5Y7/1 ③還元	口縁部はナナメ方向に直線的に立ち上がる。底部は平底で口縁に比して径が大きい。右回転ロクロ成形、底部は回転を伴う糸切り、ヘラ切り後口縁部のみヘラ調整を施す。	PL154	
2189	須恵器甕	残 胴部破 片 高 < 8.0)	①外堀②23 トレ3区	①夾雑物微量② 灰7.5Y5/1・灰 N5/1③還元	胴部上半の破片。肩部は丸く張り出す。外面はナデ調整を施す。内面はアテメをナデ消すがその痕跡が残存する。	PL154	
2190	須恵器蓋	残 つまみ 周辺 高 < 2.1)	①外堀②24 トレ	①チャート、白 色鉾物粒②灰白 7.5Y7/1③還元	天井部はあまり膨らみを有さない。径5.8cmのリング状のつまみを付ける。右回転ロクロ成形である。	PL154	
2191	須恵器長頸壺	残 台部1/ 2 底 (13.0) 高 < 4.5)	①外堀②27 トレ	①黒色鉾物粒を 含入。器面に発 泡、溶解する。 ②灰黄2.5Y6/2 ③還元	ロクロ成形。台部は低く、ハの字状を呈する。裾端部は上縁の稜が突出する。	PL154	焼き歪みが生じている。内外面に自然釉が及ぶ。
2192	須恵器長頸壺	残 頸部下 位 高 < 10.5)	①外堀②28 トレ溝内	①黒色・白色鉾 物粒②灰白7.5 Y7/1③還元、や や軟質	残存部下端の直径は6.8cmを測る。粘土紐を巻き上げ後内外面をロクロにより再整形している。	PL154	
2193	須恵器大甕	残 胴部破 片 高 < 13.8)	①外堀②23 トレ3区、 27トレ	①白色鉾物粒② 灰白5Y8/2③還 元、軟質	外面、疑似格子目状のタタキを残す。内面にはアテメを残す。		
2194	須恵器甕	残 口縁部 破片 高 < 5.6)	①外堀②23 トレ3区	①胎土細かい。 黒色鉾物粒少量 ②灰 N5/ ・灰 10Y6/1③還元	外反して立ち上がる。内外面にロクロ痕がみられる。		
2195	須恵器大甕	残 口縁部 ～胴部破 片 高 < 6.8)	①外堀②27 トレ	①一部黒色の発 砲。白色鉾物粒 ②灰N6/1③還元	口縁部は直立ぎみに立ち上がり上方で外反すると思われる。外面は口縁部の一部と胴部に疑似格子目状のタタキメを施す。胴部内面にはアテメを残す。	PL154	
2196	須恵器大甕	残 胴部破 片 高 < 8.0)	①外堀②27 トレ	①石英②灰N5/1 ③還元、焼締め	外面はタテ方向のタタキメ。内面はアテメをナデ消している。		
2197	須恵器大甕	残 胴部破 片 高 < 8.1)	①外堀②27 トレ	①白色・黒色鉾 物粒②灰 N6/1 ③還元	外面は格子状のタタキメを施す。内面には同心円状のアテメを残す。	PL154	
2198	須恵器大甕	残 胴部破 片 高 < 9.1)	①外堀②27 トレ	①白色・黒色鉾 物粒②灰 10 Y 5/1③還元	外面は格子状のタタキメを施す。内面には同心円状のアテメを残す。	PL154	
2199	須恵器大甕	残 胴部破 片 高 < 11.6)	①外堀②27 トレ	①石英・チャ ート②灰 N5/1③ 還元、焼締め	外面はタテ方向のタタキメ、内面にはアテメを施す。		
2200	須恵器大甕	残 胴部破 片 高 < 11.2)	①外堀②28 トレ溝内	①白色鉾物粒② 灰 5 Y 6 / 1 ・ 灰 N6/1③還元	外面、格子目状のタタキ。内面、アテメを残す。	PL154	外面に自然釉がかかる。
2201	須恵器大甕	残 胴部下 半1/4 高 < 13.3)	①外堀②28 トレ、前方 中央トレ	①夾雑物少ない。 黒色鉾物粒②灰 5Y6/1・灰黄2.5 Y6/2③還元	外面のタタキメ、内面のアテメ、ともにナデ消され、わずかにその痕跡を残す。	PL154	

須恵器(9) (第331図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2202	須恵器 大甕	残 口縁部 破片 高 <13.2>	①外堀②28 トレ溝内	①石英、長石② 灰 N4/1③ 還 元、焼締め	頸部には補強帯をめぐらせる。外面は2条1単位 の沈線により文様帯を区画する。最下段は幅広の 無文帯で、その上位の区画内には波状文が施され ている。	PL153	
2203	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <3.7>	①外堀②28 トレ	①黒い発泡。白 色鉱物粒②灰7.5 Y6/1・灰 N5/1 ③還元	外面、格子目状のタタキメ、内面、アテメを残す。		
2204	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <5.7>	①外堀②28 トレ溝内	①白色鉱物粒② 灰7.5Y6/1・灰 N5/1③還元	外面タテ方向のタタキメ、内面にはアテメを残す。		外面に自然釉が かかる。
2205	須恵器 大甕	残 胴部破 片 高 <6.5>	①外堀②28 トレ溝内	①白色鉱物粒② 灰 N4/1③還元	外面、タテ方向のタタキメ、内面、アテメを施す。		

土師器 (第331図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2206	土師器 杯	残 口縁部 破片2/3 口 13.4 高 4.7	①内堀外縁 ②31トレ2 N-26G	①粗砂②橙7.5 YR7/6③酸化	口縁部は大径で、底部との間に明瞭な段をなし直 立ぎみに立ち上がる。先端はやや尖る。口縁部は ヨコナデを施す。	PL155	外面は磨滅が著 しい。
2207	土師器 杯	残 完形 口 11.0 高 4.2	①前方面東 側②3トレ V-22G	①水渡し粘土？ 赤色粘土粒含入 ②橙2.5YR7/8 ③酸化	器形は歪みが著しい。口縁部は小径、底部との間 に弱い稜をなし、弱く外傾して立ち上がる。口縁 部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリを施す。	PL155	
2208	土師器 杯	残 口縁部 1/2 口 (12.0) 高 <3.1>	①内堀②3 トレV-26 堀底	①水渡し粘土② 橙2.5YR7/8③ 酸化	小径。口縁部と底部との境には弱い稜をなす。口 縁部はヨコナデを施す。	PL155	
2209	土師器 杯	残 破片 口 (12.4) 高 <2.5>	①前方面東 北隅②前方 部東北端I	①赤色土粒②橙 7.5YR7/6③酸 化	口縁部は直立ぎみに立ち上がる。底部との間に稜 をなす。口縁部はヨコナデを施す。		
2210	土師器 杯	残 破片 口 (12.2) 高 <2.7>	①出土地不 祥②3トレ 2区	①水渡し粘土、 赤色粘土粒②橙 5YR7/8③酸化	口縁部はナナメ上方に立ち上がり底部との境に稜 をなす。		器面は磨滅す る。
2211	土師器 杯	残 破片 口 (11.8) 高 <2.4>	①出土地不 祥①1トレ 拡1	①粗砂、輝石② 橙5YR6/6③酸 化	口縁部は底部から彎曲して立ち上がり短い。口縁 部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリを施す。		
2212	土師器 杯	残 破片 口 (11.8) 高 <2.2>	①外堀②28 トレ	①細砂②橙5YR 6/6③酸化	口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。口縁部にはヨコ ナデを施す。		
2213	土師器 杯	残 破片 口 (11.2) 高 <2.4>	①外堀②28 トレ	①粗砂②橙2.5 YR6/8③酸化	口縁部はナナメ上方に立ち上がる。底部は深みが ない。口縁部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ を施す。		
2214	土師器 杯	残 破片 口 (11.2) 高 <2.0>	①外堀②28 トレ	①粗砂②橙5YR 6/6③酸化	口縁部はナナメ上方に立ち上がる。口縁部はヨコ ナデ。底部はナデ後下半部のみヘラケズリを施す。		

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	写真	備考
2215	土師器 甕	残 口縁 ～底部破片 口 (23.6) 高 < 35.4)	①外堀②27 トレ	①輝石あるいは 角閃石と考えら れる黒色鈳物粒 ②にぶい橙7.5 YR6/4・暗灰 N3/1③酸化	口縁部は屈曲弱く立ち上がり、先端が弱く外反する。胴部は丸みを有し尖底の底部に続くと考えられる。器内は全体に薄い。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナナメヨコ方向にヘラケズリを施す。	PL155	
2216	土師器 杯	残 底部1/ 3 口 (14.0) 高 3.8	①外堀②28 トレ	①粗砂、輝石② にぶい橙5YR 6/4・橙2.5YR 6/6③酸化	口縁部はわずかにナナメ上方に立ち上がる。底部は浅い。口縁部はヨコナデ。底部外面は不定方向にヘラケズリを施す。	PL155	
2217	土師器 杯	残 1/4 口 (20.2) 高 < 6.1)	①外堀②28 トレ	①細砂②橙5YR 6/6③酸化	底部は丸く深みを有する。口縁部は短く、底部から内彎ぎみに立ち上がる。口縁部ヨコナデ、底部外面はヘラケズリを施す。	PL155	

墓壇 3 出土遺物 (第332図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	写真	備考
2218	須恵器 高台付 椀	残 高台剥 落 口 13.7 高 < 4.7)	①外堀②25 トレ1土坑	①結晶片岩、石 英多量②褐灰7. 5YR6/1・一部 橙7.5YR6/6③ 還元、軟質	口縁部はナナメ上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形、底部糸切り離した後高台を取り付け周辺にヨコナデを施す。	PL155	器面は著しく磨滅している。

平安時代以降の土器 (第334図)

No.	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	写真	備考
2234	須恵器 蓋	残 1/4 口 (14.4) 高 3.3	①くびれ部 西側②C- 5	①白色・黒色鈳 物粒少量含入② 灰10Y6/1③還 元	つまみは径4.0cmのリング状を呈する。天井部は張りのない扁平な形状である。端部は下方にわずかに折れる。右回転ロクロ成形。天井部のつまみ寄りの一部に回転を伴うヘラケズリが施される。	PL155	
2235	須恵器 蓋	残 天井部 1/4 高 < 2.3)	①後円部墳 頂部～上段 ②後円C- 1	①白色鈳物粒② 黄灰2.5Y5/1③ 還元	右回転ロクロ成形。天井部外面は丁寧にナデられる。つまみはリング状を呈し、径4.0cmが想定される。	PL155	
2236	須恵器 杯	残 破片 高 < 1.9)	①外堀②拡 5	①精選、白色鈳 物粒②灰白5Y 7/2③還元、焼締 め	口縁部は平底の底部からナナメ上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形と考えられる。		
2237	須恵器 杯	残 口縁部 破片 高 < 3.7)	①外堀②拡 5	①精選、夾雑物 微量②灰5Y5/1 ③還元	右回転ロクロ成形か。		
2238	須恵器 杯	残 破片 高 < 3.8)	①くびれ部 東側②拡4 裾部	①精選、白色鈳 物粒②黄灰2.5 Y6/1③還元	口縁部はナナメ上方に立ち上がり先端はやや尖る。ロクロ成形。		
2239	須恵器 高台付 椀	残 底部1/2 高 < 3.2)	①くびれ部 東側②拡4 周堀	①長石②灰白N 7/③還元、軟質	底部には断面台形の低い高台を貼り付ける。右回転ロクロ成形。底部切り離した後高台取り付け。	PL155	
2240	須恵器 高台付 椀	残 口縁部 破片 底(7.0) 高 < 1.7)	①出土地不 詳②1トレ	①チャート、雲 母②灰黄2.5Y 7/2・灰N4/1③ 還元、軟質	右回転ロクロ成形。底部糸切り離した後高台を貼り付ける。	PL155	内面に黒斑状を呈する部分あり。

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2241	須恵器 高台付 椀	残 底部 底 6.6 高 < 1.7)	①外堀②24 トレ	①粗砂、片岩あ り。②灰白7.5 Y7/1③還元、軟 質	底部には低い高台が付く。ロクロ成形。	PL155	器面の磨減顕 著。
2242	須恵器 高台付 椀?	残 破片 高 < 1.9)	①後円部南 側(後方)② 1トレ2J -20G	①白色鉱物粒② 灰5Y5/1③還 元、軟質	口縁部下半の破片である。底部には回転糸切り後 高台を貼り付ける。		
2243	須恵器 杯	残 下半1/3 底 (8.0) 高 < 1.1)	①後円部墳 頂部～上段 ②1トレ2 G-20G	①赤色粘土粒② にふい橙5YR 6/4③酸化	口縁部はナナメ上方に立ち上がる。底部回転糸切 り離し後無調整。		
2244	須恵器 杯	残 底部破 片 高 < 0.7)	①外堀②拡 5	①白色鉱物粒② 黄灰2.5Y6/1③ 還元	ロクロ成形、底部回転糸切り離し後無調整。		
2245	須恵器 短頸壺	残 口縁部 欠損、胴部 3/4 胴 23.8 底 15.7 高 < 25.0)	①くびれ部 東側・外堀 北西隅②拡 4、6号埴 輪、拡5	①粗砂、石英、 黒色鉱物粒②灰 10Y6/1③還元	胴部は上位に最大径を有する。口縁部はくの字状 に屈曲して立ち上がるが先端は欠損する。平底。 成形は紐作りと考えられ、これにロクロ使用の再 整形を行っている。	PL155	下半部を中心に 器面の剥離が顕 著である。

軟質土器・陶磁器 (第335図)

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	写 真	備 考
2246	軟質陶 器	残 破片	①外堀②拡 5	①白色鉱物粒② 灰5Y4/1③還元	内耳鍋の胴部下半と考えられる。ややナナメ上方 に立ち上がる。内外面ともナデを施す。	PL156	
2247	軟質陶 器	残 破片	①前方面西 北隅②14ト レT-14G	①白色鉱物粒② 灰黄褐10YR5/2 ③還元	内耳鍋の口縁から頸部の破片と考えられる。頸部 はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。内外面 ともナデを施す。	PL156	
2248	軟質陶 器	残 底部破 片	①外堀②11 トレ2A- 5G	①白色鉱物粒② 褐灰10YR4/1 ③還元	内耳鍋の底部破片と考えられる。底部は丸底を呈 するか。	PL156	
2249	軟質陶 器	残 底部破 片	①出土地不 明	①細砂②明褐7.5 YR5/6③還元	内耳鍋の破片。器高は浅く盤形を呈する。底部は 平底である。	PL156	
2250	かわら け 皿	残 口縁部 の一部が欠 損する。 口 10.4 底 4.9 高 3.0	①後円部西 側②C-2 ・II-3	①細砂、輝石② 橙5YR6/6③酸 化	口縁部はナナメ上方に立ち上がる。成形は右回転 ロクロ成形、底部は回転糸切り離し後無調整であ る。	PL156	内面には炭化物 が付着。灯明皿 として使用され たと考えられ る。
2251	かわら け 皿	残 1/3 口 (12.6) 底 (8.0) 高 3.0	①出土地不 明	①黒色鉱物粒② 橙5YR6/6③酸 化	口縁部は低く、ナナメ上方に立ち上がる。先端は 外側が肥厚する。ロクロ成形、底部は回転糸切り 離し後無調整である。	PL156	
2252	かわら け 皿	残 底部1/ 3 底 (7.0) 高 < 2.6)	①後円部墳 頂部～上段 ②後円C- 1	①雲母②にふい 橙7.5YR6/4③ 酸化	口縁部は平底の底部からナナメ上方に向けて立ち 上がったか。底部は回転糸切り離し後無調整であ る。	PL156	
2253	かわら け 皿	残 口縁部 1/3 口 (10.8) 高 < 2.9)	①後円部西 側②6トレ	①粗砂②にふい 黄橙10YR7/3 ③酸化	小径。口縁部はナナメ上方に立ち上がる。右回転 ロクロ成形。	PL156	中世面から出 土。

No	器種	量目	出土位置	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特徴	写真	備考
2254	かわらけ皿	残破片 口(9.3) 高<2.4>	①後円部南側(後方)②10トレ	①粗砂少量混入 ②にぶい黄橙10YR6/3③酸化	小径の皿状を呈すると思われる。	PL156	内外面に炭化物付着。
2255	かわらけ皿	残底部破片 高<1.8>	①くびれ部東側②17トレ	①輝石、雲母②橙7.5YR6/6③酸化	底部は回転糸切り離し後無調整である。		
2256	青磁碗	残口縁部破片 高<3.0>	①外堀②25トレJ-15G	①精選②にぶい黄2.5Y6/3③還元	龍泉窯系。口縁部はナナメ上方に立ち上がり、外面の先端がごくわずかに膨れる。外面にはタテ方向のクシメが施されるが、蓮弁の削り出しは判然としない。釉に貫入が認められる。	PL156	
2257	常滑甗	残胴部破片 高<3.7>	①後円部南側(後方)②1トレ2H-20G	①白色鉾物粒②暗オリーブ5Y4/3③還元、良好	外面に残る調整痕はタタキメか。内面にはナデ調整が施される。	PL156	
2258	常滑甗	残胴部破片 高<4.6>	①後円部南側(後方)②20トレ9区	①細砂大の白色鉾物粒を含む。 ②灰褐5YR4/2③還元	内外面ともナデ調整を施す。	PL156	
2259	常滑大甗	残頸部破片 高<6.0>	①外堀②27トレ	①粗砂大の白色鉾物粒②にぶい褐7.5YR5/4③還元	器肉は1.4~1.8cmとやや厚みを有する。内外面ともナデが施される。	PL156	内面に自然釉がかかる。
2260	常滑甗	残破片	①後円部南側(後方)②1トレ2N-20G	①白色・黒色鉾物粒②にぶい褐7.5YR6/3③還元	胴部の小破片である。器肉は6mmと薄い外面はタテ方向にナデを施す。	PL156	
2261	常滑大甗	残胴部破片 高<8.6>	①外堀②2トレ2E-7G	①粗砂大の鉾物粒を含む。②にぶい赤褐2.5YR5/4③還元	外面はタタキメ、器肉は1.0~1.3cmである。ナデ調整を重ねている。内面は粘土紐の接合痕をナデ消している。	PL156	
2262	常滑大甗	残胴部破片 高<7.4>	①後円部東側②22トレ	①白色鉾物粒②にぶい赤褐2.5YR5/4③還元	外面はハケメに粗いナデを施す。内面はヨコナデを施す。	PL156	
2263	常滑大甗	残胴部破片 高<10.5>	①くびれ部東側②17トレ4区	①白色鉾物粒を多量に含む。②にぶい赤褐2.5YR5/4③還元	外面はナナメタテ方向のタタキメにナデ調整を重ねている。内面はナナメヨコ方向にナデしている。	PL156	
2264	常滑大甗	残胴部破片 高<11.6>	①前方部西北隅②拡2周堀内	①細砂状の白色鉾物粒②にぶい赤褐2.5YR5/3③還元	外面はナナメタテ方向のハケメにナデを重ねる。内面はヨコ方向にナデを施す。	PL156	
2265	常滑大甗	残胴部破片 高<12.7>	①後円部東側②22トレ3区	①粗砂大の鉾物粒②にぶい赤褐2.5YR5/4③還元	外面はタテ方向に粗雑なハケメを、内面はヨコ方向にナデを施す。	PL156	
2266	常滑大甗	残底部破片 高<6.0>	①外堀②拡5外堀内	①細砂大の白色鉾物粒②にぶい褐7.5YR5/3③還元	底部は平底である。内外面ともナデ調整を施す。	PL156	内面に自然釉がかかる。

石造物 (第336図)

No	器種	量目	出土位置	石 材	特 徴	写 真	備 考
2267	板碑	残 一部欠 損 高 <50.1> 幅 17.5 厚 3.1	①後円部南 側(後方)② 1トレ2H -20G	緑泥片岩	表面に向かって右上位から側部が欠損する。器面は全体に風化が進み、種子は不鮮明になっている。裏面の上位に2箇所、平ノミ状工具痕が認められる。	PL157	
2268	板碑	残 一部欠 損 高 <48.4> 幅 16.1 厚 2.0	①出土地不明	緑泥片岩	下部側縁の一部を欠損する。頂部は山形を呈する。種子は一尊と考えられ蓮台に乗る。キリークか。	PL157	
2269	板碑	残 基部欠 損 高 <61.2> 幅 24.5 厚 1.5	①出土地不明	緑泥片岩	頂部は山形を呈する。横幅は下位に移行するに従いやや大きくなる。種子は一尊で蓮台に乗る。キリークか。	PL157	
2270	板碑	残 上部破 片 高 <30.7> 幅 22.8 厚 2.7	①後円部墳 頂部～上段 ②石室上部	緑泥片岩	頂部の山形先端は成形が粗雑で左右線対称の形状をなさない。器面は風化が著しく種子は不鮮明である。裏面に幅1.5cm程の平ノミ状工具痕が横方向に残存する。	PL157	
2271	板碑	残 中位破 片 高 <32.0> 幅 20.3 厚 2.9	①後円部 墳頂部～上 段②1トレ 2F-20G	緑泥片岩	裏面は剝離が進行している。	PL157	
2272	石造物 石碑の 台座	高 12.5～ 14.5 横幅 34.5 奥 31.4	①出土地不明	安山岩	石造物の台座と考えられる。側部正面は蓮弁が5葉刻まれている。裏面には粗雑な器面加工痕がみられる。上面は平坦で中央に長14.2cm、幅2.0cmの浅いへこみが残されている。	PL157	
2273	五輪塔	高 <24.0> 最大幅 14.7 奥 14.5	①出土地不明	角閃石安山岩	空風輪である。空輪は風輪に比して大きく、先端が突出する砲弾形を呈する。両者の間には垂直に立ち上がるくびれ部が形成されている。最大幅を1とした場合の高さの割合は1:1.6である。	PL157	

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告書第242集

綿貫観音山古墳Ⅰ
—墳丘・埴輪編—



《遺物観察表編》

平成10年3月20日 印刷
平成10年3月25日 発行

編集・発行／財群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-0061 勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社